群馬県 青年部だより

ご染筆 小渕千鶴子 支部顧問

第七号
令和六年 三月

令和五年 総会・講演会

令和5年5月28日
於 前橋市中央公民館

令和五年総会が開催されました。事務長はじめ同門会支部役員のご臨席をいただき、令和四年事業報告並びに会計報告、令和五年事業計画案、並びに予算案が承認されました。

総会後には、群馬県を代表する俳人である木暮陶句郎氏をお招きし、ご講演いただきました。

俳句がなぜ日本中で作られているのか。

その第一の理由として、日本に四季があるから、とのことでした。そこに、季節ごとの設えでお客様をもてなす茶道とも近い、心の趣を感じました。

俳句の基本的なルールを伺った後は、実際に句会の形式を体験しました。掛軸の「瀧」や、竹籠に設えた花などを席題として、俳句を作りました。

参加者のほとんどが初めての作句でしたので、最初は、皆さん指を折りながら、言葉選びに苦戦していました。しかし、制限時間の二十分間で五句ずつ作ることができました。

それぞれ個性的な句ができあがり、選句作業は心踊る時間となりました。

俳句という短い詩が、全国津々浦々で作られている理由。そのもう一つがわかった気がしました。それは、とにかく「楽しい」からではないでしょうか。

言葉を選ぶのも、他の人が作った句からその情景を想像するのも、とにかく「楽しい」ことでした。

「楽しい」は、人が物事に取り組む原動力となるのだ、ということを改めて感じた「五月尽」の一日でした。

第一回 不菴庵 短期講習会修了生 大同窓会

令和5年6月25日
於 京都市勧業館みやこめっせ

私が短期講習会に参加してから18年が経ち、あの同窓生たちはどうしているのかと思いを馳せながら会場に足を運びました。見覚えのある方が数名おりドキドキしながら声をかけると、一瞬にしてあの時の記憶がよみがえり当時のようにワイワイとおしゃべりに花が咲きました。他県の青年部の部長をされていたり、出産し子育てをしながらお稽古を続けていたりと同窓生たちの近況を知り感慨深いものがありました。

お道具拝見の列に一緒に並んだ方々、懇親会のテーブルを囲んだ方々、「短期講習会を経験した仲間」であれば初めてお会いした同窓生ともすぐに打ちとけ話しは尽きぬまま終了の時間になりました。同年代の方々と互いの情報交換をしたりととても貴重な時間でした。

私が参加したのは「春」でした。春といってもまだまだ底冷えが厳しく、体は疲れているのに寒くて眠れない1週間だったと記憶しています。

京都の寒さと長時間の正座を耐え抜き、得た経験は何ものにも変え難い一生の宝物であります。短期講習会がこれからも続くことを願い、この度大同窓会という機会をもうけて頂いたことに感謝申し上げます。

第二回 表千家 青年部研修会

令和5年9月10日
於 表千家会館等

コロナ禍を経て5年ぶりに、全国の青年部の仲間が集う研修会が京都の家元本部にて開催されました。群馬県からは3名の青年部員が参加し、神奈川と東京の青年部の皆さんとお席や見学をともにしました。

まずは、ご祖堂を参拝して不菴庵を見学したのち、ふだんは教授者だけが使用できるという表千家会館の一室で、家元本部席に席入りしました。例に漏れず、なかなか正客が決まらずにいたところ、内弟子さんの一声で、私たちが上座に座らせていただくことになり、ドキドキしながらの席入りとなりました。お菓子は、秋に初めて北から渡り夜空を飛ぶ雁が黒蜜とゆり根で表現された「初雁」でした。特別な空間でもてなされた一席に、あらためて茶道に向かう姿勢が正された思いです。

点心席をはじめ、表千家会館から、表千家北山会館への移動中にも、行事や茶会の様子、広報や運営の工夫や悩みなど、他県青年部の皆さんとも話が尽きず、情報交換し、交流できたこともよい思い出です。

北山会館では、まだ残暑の厳しい季節のなかで涼を感じる展示や茶の湯の中の生き物をテーマにしたかわいらしい展示に心和みました。青年部席では、京都青年部の「飛翔」にちなんだ、丸い青空に飛行機が飛ぶかわいいニキニキ製のお菓子を、同じく青空に悠々と舞う鶴が表現されたお茶碗で頂きました。力強い「胡漏難退散」のお軸に見守られ、徳利を花入に、陶器のクッキー入れを水差しとして使われた「見立て」や、青年部員やそのお身内が創作された品々で構成されたお道具組みなど、京都の茶道人材の厚みと遊び心が伝わるおもてなしでした。

参加者全員が集まったホールでは、まず、お家元宗匠より直々にご挨拶を頂きました。講話では、『南方禄』より、仏教を基本として日常生活のあり方と結びつく「茶の湯の心持ち」についてのお話がありました。続く座談会では、京都青年部の皆さんのお話を軸に、各地の青年部の運営や実情について意見交換が行われました。

今回私は初めて青年部研修会に参加し、多くのことを学ばせていただきました。久方ぶり対面でのお稽古や会合が再開されていますので、これからは他の青年部の皆さんとも同じ表千家茶道を習う友人としてますます交流を深め、切磋琢磨していけたらと思います。

着付け講座

令和5年12月10日
於 前橋市公民館

今回、私が着付け教室に参加したきっかけは、母と祖母の影響でした。母は、華道を習い、祖母は、茶道とお箏を習っていました。その影響で、幼い頃から日本文化に触れる機会が多く、興味を持っていました。現在私は、茶道とお箏を習っていますが、自分ひとりで着物を着ることができません。そのため、この機会を逃さないようにと参加を決めました。

実際に着付けを体験してみると、思っていたよりも大変で苦戦しました。はじめは着付け道具の名称もわからず、襟合わせや補正、重ねる順番など覚えることがあまりにもたくさんありました。一人で着るのは本当に難しかったですが、先生方やほかの参加者にも助けてもらいながら、なんとか最後まで着ることができました。

体験を通して、私には一つの夢ができました。それは、お茶会に着物を着て参加することです。先日、初めて同門会支部のお茶会に参加させてもらいました。そこではたくさんの方々が着物を着て、髪を綺麗にまとめ、髪飾りや小物を素敵に身に付けていました。その姿に私はすごく憧れを持ちました。私がこうして憧れを持ったように、私も誰かの憧れになれるように着物を着こなせるようになりたいと思いました。そのためには、この講座で学んだことをたくさん練習して一人前にできるようになりたいと思います。

着付け教室への参加は、私の経験値を上げるための貴重な体験になりました。着物を自分で着られるようになれば、お正月や結婚式などの多くの場面でも活かせると思います。また、茶道をはじめ、華道やお箏といった日本の伝統文化が、世界中に広まることを願っています。

研修旅行

令和6年2月23日
於 国立科学博物館・柿傳

和食と懐石を学ぶ

冷たい雨が降るあいにくのお天気でしたが、「和食」研修旅行に行ってまいりました。午前中に国立科学博物館にて開催中の特別展「和食 ～日本の自然、人々の知恵～」を見学し、新宿の柿傳にて昼食を頂き、午後はサントリー美術館の四百年遠忌記念特別展「大名茶人 織田有楽斎」を見学しました。

和食といえば、平成25年12月に「和食：日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録され、世界中から注目を集めています。茶道を学んでいる身としては茶事の懐石料理が思い浮かびますが、和食を科学的視点から見ると何が見えてくるのか？映像や展示、体験コーナーを通じ、食材としての和食、過去から現在そして未来の和食を学びました。

東西南北に細長く周りを海に囲まれ山も多い日本列島は、地域ごとに気候や風土も異なり、食材や食文化も地域ごとに特色があります。その特色により発展した地域ごとの和食が今も続いていることを誇らしく思う一方、徐々に失われている現在を少し残念に思いました。和食が本当の「遺産」になってしまわないように和食の現状を知り、継承していくことの重要性を深く感じました。

地域や食材による多種多様な和食や、歴史上での食事を見学してお腹が空いてきたところで、新宿にある「京懐石 柿傳」へ。茶事形式の懐石料理もありますが、つい手順や所作に気を取られてしまいがちですので、今回はコースでの昼食をいただきました。午前中に和食を勉強したからか、普段は気づけないことに気づけたり、味付けや産地について推察したり、いつもの懐石料理とは違った視点で味わえました。

美味しい昼食をいただいた後に、思いがけず案内された柿傳ギャラリーでの「唐津焼 11人展」。作家それぞれの特色ある作品に圧倒されました。目の保養の後はサントリー美術館の特別展を見学し、とても充実した研修旅行になりました。

特別展 大名茶人織田有楽斎

於 サントリー美術館

織田有楽斎（織田長益）は織田信長の十三才下の弟として生まれ、信長、秀吉、家康の元で武将として活躍した人物で、晩年に京都建仁寺の塔頭である正伝院を再興、隠棲し茶人として名を残しています。正伝院内に建てた茶室「如庵」は国宝に指定されています。

焼失等多くあった戦乱の世に守られ、あるいは潜り抜けたであろう有楽斎が所持していた茶道具や手紙など当時を物語る多くの展示物がありました。

とても強い印象を受けたのは、有楽斎の所有となったのちに豊臣家へ献上された茶入れで大阪夏の陣で割れ、その後漆にて修復され家康に献上されたという「唐物文林茶入 銘 玉垣」。平成元年に漆が剥げかけていたことから解体修理されたとありましたが、解体の写真はバラバラどころではなく粉々で、よくぞ当時もそして現代も修復したものだと職人技に驚きました。黒茶碗の大きく欠けた部分に染付の陶片を繕った「呼継茶碗」もとても目を引く存在でした。自分がいかに「概念」にとらわれているか考えさせてくれるお茶碗でした。筒茶碗の展示が多いと感じたのは、たまたま時期（二月）だからか、または当時は筒茶碗が多かったのか。勉強不足のため今後調べてみようと思いました。手が入らないほどの深く大きな筒茶碗はいったいどのようにして扱っていたのかも疑問です。お稽古で使っている筒茶碗はなんて点てる人に優しい形なのだろうか、と思わずにはいられませんでした。

今現在は愛知県大山市にある「如庵」。修復開始の前年に訪れましたが、修復が終わった姿を見にまた訪れてみたいと思います。

青年部入会のお知らせ

表千家不審菴入門者または入門を希望される方であればどなたでも入会いただけます。対象は満 18歳以上 45歳までの方で、先生の推薦が必要です。

研修旅行、勉強会など和気あいあいとした雰囲気で行っています。

茶会では、忙しい中にも笑顔があり一日を終えると仲間との団結力がより一層深まります。

私たち青年部一同は皆様の若いエネルギーを必要としております。入会ご希望の方は青年部メールアドレスにてお知らせください。追って申し込み用紙を送付いたします。

青年部卒業の案内

規約により、45歳のお誕生日を迎えられた方は、青年部卒業となります。

今年度末にて卒業の方々におかれましては、これまでのご協力に感謝いたします。

今後、同門会などで益々のご活躍をお祈り申し上げます。

※今年度は、昭和53年4月から昭和54年3月生まれの方

青年部からのおしらせ

表千家群馬県青年部 令和4年度収支報告書　自 令和4年4月1日　至 令和5年3月31日

（単位：円）

収入の部	
前年度より繰越金	399,129
支部助成金	65,000
会員年会費	22,000
参加者負担分（青年部茶会）	6,000
参加者負担分（藍染体験）	25,000
合計	517,129

支出の部				
事業関係諸費用	総会・講演会	48,295	維持運営管理費用	会議費 4,300
	青年部茶会	42,178		交通費 21,300
	研修会（藍染体験）	32,160		通信費 9,108
				印刷費 0
				消耗品費 0
				雑費 0
	小計	122,633		小計 34,708
	合計			157,341
	翌年度繰越			359,788
	合計			517,129

住所・氏名等の変更について

青年部では行事案内等をご登録の住所宛にお送りしております。登録内容に変更がある方は、行事案内等の返信の備考欄にご記入いただくか、青年部メールアドレスにてお知らせください。都合により退会される方も、お知らせください。

編集後記

今回も無事に青年部たよりをお届けすることができました。執筆にご協力くださった皆さまにはこの場を借りて感謝申し上げます。

コロナ禍より徐々に日常をとり戻し、大寄せの茶会や全国規模の研修会なども再開されるようになりました。茶道を通した人とのつながりやご縁にあらためて感謝する、そんな一年でした。

昨年群馬県青年部では役員の半数が卒業され、現在では役員3名、部員15名にて活動をしております。少人数となりましたが、その利点を活かし、部員の皆さまの声を反映させ、他の都道府県の青年部の皆さまとも交流を深めながら活動を進めて参りたいと思っております。

青年部たより 第7号
2024年03月31日
発行：表千家群馬県青年部
青年部メールアドレス
omotesenke.g.seinenbu@gmail.com